

鈴木忍とタイ —戦時下のバンコク日本語学校での仕事を中心に—

河路 由佳

要 旨

鈴木忍は終戦を挟む1941年7月から1946年7月まで5年間をタイで過ごした。終戦までの4年間を、タイのバンコク日本語学校において日本語教育に尽力し、1943年7月には29歳にして校長に就任している。

鈴木忍は戦後日本に帰国してから、国際学友会日本語学校、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校で中心的役割を果たしたばかりか、1962年の外国人のための日本語教育学会の設立を促してこれを実現し、『NIHONGO NO HANASIKATA』そして『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』『日本語初歩』などの日本語学習書や参考書を著した。これらは日本国内はもとより海外でも広く使われ戦後の日本語教育に貢献したが、その準備は戦時下のバンコク日本語学校でなされたと言える。

戦争中に日本は国を挙げて日本語普及を推進し、これが戦後の日本語教育の発展の基礎になっていることは疑いない。本稿は戦時中の日本語教育が戦後にもたらした影響のひとつを具体的に検証するものである。

【キーワード】 鈴木忍、戦時下の日本語教育史、日本語普及政策、バンコク日本語学校、国際学友会

1. はじめに

鈴木忍は戦後の日本語教育の発展に大きな功績を残した人物で、「学友会の赤い本」と呼ばれた『NIHONGO NO HANASIKATA』（国際学友会日本語学校）や、『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（東京外国語大学外国語学部附属日本語学校）、『日本語初歩』（国際交流基金）の著者としても知られている。鈴木忍と日本語教育との出会いは1936年の9月に国際学友会に職を得た時にさかのぼるが、責任ある立場で教材開発を含む学校運営に取り組んだのは、1941年7月にタイのバンコク日本語学校に赴いてからのことである。この経験は、その後の鈴木忍に大きな影響を与えたものと思われる。本稿はこれまで焦点が当たることのなかった鈴木忍の在バンコク時代に注目するものである。鈴木（1981）所収の年譜と鈴木忍自身が1974年に当時のことを語った談話資料、また筆者が2006年6月に実施した鈴木泰氏への聞き取り調査資料から得ら

れた情報に関連資料を突き合わせ、事実関係を明らかにし、その意義を考察する。

日本語教育の歴史の上で特に 1930 年代から 1945 年の敗戦までの期間は、日本が国を挙げて日本語普及を推進していた時期にあたり、これが戦後の日本語教育の発展の基礎になっている。しかし、戦中戦後については資料の散逸もあって具体的検証が少なく、事実が誤って伝えられていることも少なくない。本稿は鈴木忍という一人の日本語教育者のバンコクでの仕事とその戦後への影響を明らかにすることで、日本語教育史の戦中戦後の関わりの一例を検証するものである。また、戦前戦中戦後を日本語教師として生き抜いた人物のライフストーリー研究の試みでもある。歴史的社会的変化を乗り越えて日本語教育に尽力した鈴木忍の人生にとって、戦時下のタイでの体験はいかなる意味を持ったのだろうか。鈴木忍とタイの関係に着目して考えることで、環境の変化に耐える日本語教師の在り方への示唆を得たいと考える。

なお、本稿で引用する日本語における漢字は現代の常用字体に改めて示した。原文の縦書きを横書きに転記する際、読みやすさを考えて漢数字をアラビア数字に改め、繰り返し符号についてはこれを用いずに表記した場合がある。また、「タイ」及び「バンコク」の表記について、本稿では引用部分を除き「タイ」「バンコク」に統一した。原資料の上では、タイの国名は 1939 年 6 月までは「シヤム」で、日本の文献においては「暹羅」と表記され、日本との関係は「日暹^{にっせん}関係」と書かれることがあった。1939 年 6 月に国名が「タイ」に変わってからは「泰」と漢字をあてて書かれることが多かった。バンコクについては当時の資料では「盤谷」また「バンコック」と書かれる場合があり、バンコク日本語学校の名称もこれに準ずる。

2. 1930 年-45 年の日タイ関係とバンコク日本語学校

鈴木忍がバンコクに赴いたのは、アジアの数少ない独立国としてタイと日本の交流が双方国を挙げて促進され、日本の外務省文化事業部でも 1938 年度からタイとの文化交流事業に力を入れた国策によるものであった。その政治的社会的状況をまず確認しておく。

西野順治郎 (1984)、石井米雄・吉川利治 (1987) がその交流の歴史をそれぞれ 400 年前、600 年前に遡るように、タイと日本の交流の歴史は古く、近代以降の政府レベルのとりくみも 1887 (明治 20) 年の「日暹修好宣言書」の調印に遡ることができる。

本稿で扱う時期について述べると、特に 1933 年 2 月日本の「満州国建国」

に関する国際連盟における表決でタイ代表が棄権してから⁽¹⁾、交流の促進に拍車がかかった。1933 年後半からタイの日本留学希望者が急増し、彼らのための保護善導機関が必要だと在タイ全権公使矢田部保吉の訴えをきっかけに 1935 年 12 月、外務省文化事業部の管轄の下に国際学友会が設立された(河路 2003)。これが鈴木忍の最初の職場となった。矢田部保吉は当時の日タイ交流の中心的な役割を果たした人物だが、1940 年度より国際学友会の理事を務め、1941 年度より専務理事となった。鈴木忍にタイでの仕事を斡旋したのは矢田部保吉である。

国際学友会の所管官庁は 1940 年 12 月には情報局に移管され、1942 年 11 月大東亜省の設置に伴い大東亜省と情報局の共管となると、それまでの「国際文化事業」から「南方文化工作」へと性格を変えていった。これは、そのまま日本とタイの関係に反映され、国際学友会の扱う留学生の中で創立当初から 1945 年 12 月の中断まで、一貫して受け入れが続いたのはタイからの学生だけであった。

同じ時期、政府レベルでは 1940 年 6 月には日・タイ友好和親条約調印、1941 年 12 月には日・タイ攻守同盟調印、1942 年 10 月には日・タイ文化協定が調印されるなど、国を挙げて交流が促進されていた。外務省は日語文化研究所の松宮一也をタイ調査に派遣、松宮は詳細な『日暹文化事業実施調査報告書』をまとめ(松宮 1942、長谷川 2003)、1938 年に日泰文化研究所と附属バンコク日本語学校が開校した(長谷川 2000、北村・ウォラウト 2001)。

設立当初のバンコク日本語学校の運営の中心になったのは星田晋五で(北村・ウォラウト 2001)、その後任として平等通照が 1940 年 10 月にバンコクに到着、鈴木忍が講師として赴任したのは翌 1941 年 7 月である。

1942 年 9 月には日泰文化研究所附属日本語学校の分校(バンコク第二日本語学校)が開校。1943 年 4 月に財団法人日タイ文化協会が設立され学校がバンコク日本文化会館に移管されると、鈴木忍はバンコク日本文化会館の日本語教務主任とバンコク日本語学校教授を兼務し、同年 7 月、バンコク日本語学校長に就任した。

この間の日泰関係をタイ側から推進したのは 1934 年 9 月に国防相に就任、1938 年 12 月に首相に就任したピブン・ソクラームであった。ピブン政権は 1941 年 8 月に「満州国」を承認し、1941 年 12 月の日本の第二次世界大戦参戦を受けて 1942 年 1 月には米英に宣戦布告をした。が、戦争が始まると日本軍はタイに進駐、占領地同様の扱いをするようになってタイ側の日本への期待は失われ、1944 年 7 月にピブン政権が破綻して新政権に変わると、

それまでに築かれた親密な日タイ関係も綻びはじめた。1945年8月に日本の敗戦で戦争が終結すると、タイはただちに対米英宣戦布告は日本の圧力によるもので無効であると宣言を出して敗戦国扱いを免れ、9月にはそれまでに結ばれた一切の対日関係条約、協定の破棄を通告した。これに従ってバンコク日本語学校は閉鎖され、鈴木忍をはじめ日本人関係者はバンコク郊外の抑留所に収容された。それから、1952年サンフランシスコ講和条約が発効し日本が独立を回復するまで両国の外交関係は閉ざされた。

3. 鈴木忍の足跡——バンコク日本語学校時代を中心に——

3-1 バンコク赴任まで

鈴木忍は1914年3月12日、静岡県浜松市に生まれた。1936年3月、22歳で長崎高等商業学校海外貿易科を卒業、同年9月に国際学友会に就職した。外務省文化事業部の管轄の下、国際学友会は「国際文化事業」の中の留学生にかかわる実務機関として「学生ヲ通シ国際文化ノ交驩ヲ計リ、且本邦外国人学生ノ保護善導ヲ計ル」⁽²⁾ことを目的に1935年12月に設立されたが、日本語教育について特別な準備はなく、鈴木忍も日本語教員として採用されたわけではない⁽³⁾。1936年2月に留学生を収容する国際学友会館が完成すると、会館寄宿生へのサービスとして英語の授業と共に午前中2時間の日本語の授業が提供された(河路 2006: 46-49)。金澤(1973)は当時の様子を次のように伝えている。

・・・当時この道(河路注:日本語教育)の専門家を探しても果たしているかどうか、仮にいても学友会の経費で賄い得るかと云うので、結局大学や高等専門学校を卒業した事務員4、5名が、代る代る日本語を教えることとなった。教科書は国定教科書を用いる外なかった(河路注:このとき使われた国定教科書は「サクラ読本」と呼ばれる第4期『小学国語読本』であった。)。日本語の授業中に事務上の電話がかかって来る、来訪者があると云うような有様であったが、習う者の学習意欲、教えるものの誠意のためか、それでも何か月か後には日本語の教授も軌道に乗るようになり、一年程後には専門の学者を迎えるようになった。(8-9)

鈴木忍は「事務員4、5人」⁽⁴⁾の中1人としてその萌芽期より日本語教育に関わった。これが鈴木忍の日本語教育との出会いである。1936年度、1937年度と実施された午前中2時間の日本語授業は一定の成果を上げた。

10 回にわたって実施されたが、各回の生徒数は 1 名から 12 名であった。1938 年度より国際学友会では日本語教育事業に一層力を入れようと、東京帝国大学出身で言語学を専門としロシア人やモンゴル人に日本語を教えた経験を持つ服部四郎 (1908-1995) ⁽⁶⁾ を「専門の学者」として迎えた。

服部四郎が国際学友会にいたのは 1 年間のみであったが、鈴木 (1975) はこの時の服部四郎の仕事について「服部四郎先生はわれわれ日本語教師の指導をやられると同時に、新聞連載漫画『ふくちゃん』の語彙調査、それに未完成ではあったが初級教材の作成もやられた。」(p. 118) と述べている。

このときの教材について、鈴木忍は次のように語っている⁽⁶⁾。

「フクちゃん」の語彙調査がどうなったのか、結局拝見することなく終わってしまいました。服部さんのなさった仕事で残っているのは、服部さんが 5、6 課まで作成された教材の一部だけです。私の手元にあるんですが、これは今見ても大したものだと思います。現代に生きています。

これについては、川瀬 (1978) も「鈴木先生のお持ちになる資料ファイルの中には、当時服部四郎先生が試作された日本語テキストのがり版ざり草稿もある。粗末なわら半紙に印刷した数ページのものであるが、日本語に即した文型の配列など、今見ても興味深い。」(p. 4) と、述べている。

この草稿の現在の所在は不明であるが、これが鈴木忍に刺激を与えたことは間違いない。

国際学友会では 1939 年度に、服部四郎の後任として東京帝国大学の橋本進吉の下で国語学を修め、女学校で「国語」を教えていた岡本千万太郎 (1902-1978) を迎えた。日本語教育に本格的に取り組む準備として、国際学友会では教科書の編纂が急がれた。岡本はまずは独力で『日本語教科書基礎編』(1940) を完成、続く教科書編纂のパートナーとして東京帝国大学で国語学を修めた松村明、女学校の元同僚「国語」教員の武宮りえを 1940 年度より迎え、3 人で『日本語教科書 卷一—五』(1941-1943) を完成し、1943 年度には各種学校の認可を受けた 1 年制の国際学友会日本語学校が開校した⁽⁷⁾。

主任の岡本千万太郎^{ちまたろう}は、大学で国語学や国文学を専攻した者を日本語教育の「専門家」と考え、鈴木忍をその範疇に入れなかった。そして、日本語教科書の編纂はもちろん、日本語の入門段階の授業も、「専門家」以外には担当させなかった⁽⁸⁾。この頃のことを鈴木忍は次のように語っている⁽⁹⁾。

服部さんが（後任として）岡本（千万太郎）さん連れて来て、その岡本さんがまた国語の専門の人を引っ張ってきたんですね。そのころ、私は岡本さんから、「こいつは国語の専門じゃないからダメだ」と言われて、一度放り出されたことがあるんですよ。でも、私は「いやだ」と言ったんです。「ここまで（日本語教育を）やってきた以上はやるんだ」と言いました。そして日本大学の夜間の（コースの）国文の国語に入って勉強したんです。山田孝雄さんや神保格さん、秋葉安太郎さんなどの授業をうけました。秋葉安太郎さんは当時まだ若くて、演習を担当していました。そういう先生方に習いまして卒業はしませんでした。2年間通いました。そうして「どうしても私は日本語教育をやりたいから置いてくれ」と頼んで置いてもらったんです。

鈴木忍が岡本千万太郎の下で仕事をしたのは、岡本が着任した1939年4月から鈴木忍がタイへ赴任するため国際学友会を去る1941年7月までの2年3か月である。このうちの2年間を夜間の大学に通ったのだとしたら、この話し合いは岡本の着任以前になされ、鈴木忍は岡本が着任した4月から通い始めたものだろうか。卒業しなかったのは、タイ赴任が決まったからかもしれない。結果から見ると、この時の鈴木忍の忍耐と努力が後に大きな実りをもたらした。

鈴木忍は職務の傍ら熱心に勉学に励み、専門性を高めたようである。鈴木忍は同じ談話資料の中で次のように語っている。

私は1回辞めるとまで言われたのを切り抜けて、なんとか日本語教育の方の首が繋がったんですよ。「とにかく、まじめに何かやりたがっている」と分かってもらえたんですね。それから、もう一つ、当時、学友会の会計が乱れていたもので、「日本語の方の先生をやってもいいから、経理の仕事もやれ」ということで、経理の方もやらされました。

『国際学友会会報 第四号』（1941年6月現在）の名簿から、事務職員は「主事」「主事補」、教員は「教授」と分けて記されるようになったが、鈴木忍の名は「教授」として記されている。国際学友会を去りバンコクに赴く1か月前の記録である。この時「教授」は岡本千万太郎、武宮りえ、依田千町、松村明、鈴木忍、大島優美子の6名であった。学習者数は年々増加していたが、1941年度の日本語授業の受講者数は33名で、その6割以上に当たる20

名をタイ人学生が占めていた（河路 2006 : 65）。

やがて 1942 年 6 月にアメリカンスクールの広い校舎に移転、1943 年度に国際学友会日本語学校が開校されて間もなく南方特別留学生⁽¹⁰⁾の受け入れが始まると、学生数もクラスの数も飛躍的に増えるが、鈴木忍はこうした展開を見ることなく国際学友会を去っている。

岡本千万太郎はこのとき国語学振興会という名前の現代日本語の研究会を興していた。その成果は国語学振興会（1942）『現代日本語の研究』としてまとめられた。代表者、岡本の筆による「まへがき」にはこの研究会のメンバーが「東京帝大の国文学科で橋本進吉先生に国語学を教へていただいた者を中心として」（p. 3）構成されていると説明されている。巻頭論文「日本語の理想と日本語学の体系」を岡本が執筆、以下亀井孝（1911-1995）、金田一春彦（1913-2004）、白石大二（1912-1989）、江湖山恒明（1910-1989）ら当時の若手の国語学研究者らの論文が掲げられているが、国際学友会の「教授」としては岡本のほかに松村明（1916-2001）が、また所収論文の執筆後 1942 年 4 月に国際学友会に「教授」に着任する林和比古（1909-1992）が加わっている。この研究会について、鈴木忍は次のような思い出を語っている⁽¹¹⁾。

岡本千万太郎さんが中心になって国語学振興会というのを作りましてね。東大で国語学をやっている人たちが集まったわけなんです。その時に、行かなくてもいいものを、「お前も来い」と言われて私も行ったんですよ。武宮（りえ）さんなんかも行った時にご一緒して。（中略）その時に森岡健二がね、「東大関係者だけでやったらいいのに、どうして部外者をここに連れて来たんだ」と（私のことを）言いましてね。それを覚えているんですよ。

1942 年の夏に岡本が国際学友会を去り北京師範大学に向かい、代わりに東京帝国大学出身の詩人でドイツ文学者の石川道雄（1900-1959）が教育部長に着任すると、国語学者を重んじるという状況にも変化が訪れるのだが、それは鈴木忍が去ってからのことである。

鈴木忍の勤勉ぶりと熱心さに注目したのは、当時の国際学友会の専務理事で元在バンコク全権公使の矢田部保吉であった。1940 年度より国際学友会の理事を務め、1941 年度より専務理事となった矢田部保吉は、タイの希望を受けて外務省より推薦依頼を受けていたバンコク日本語学校の主任教員

の仕事は鈴木忍に斡旋した。鈴木忍は「ちょうどそのころタイから矢田部さんのところへ、『タイの日本語の教育がなくてないからこれを立て直す人』という話があったというので」⁽¹²⁾、これに応じたと言っている。

鈴木忍は赴任に先んじてタイ語の学習に励み、1941年7月に日本語教育の専門家としてバンコクに赴いた。事務手続きの上では、国際学友会を退職し、外務省文化事業部からバンコク日本語学校へ日本語講師として派遣されたことになっている。

3-2 在バンコク時代 (1941年7月-1946年7月)

バンコク日本語学校は、1937年7月にアメリカ、カリフォルニア大学での日本語教育を終えて帰国した松宮一也が外務省からの委託を受けて調査し、考察と提案を行った『日暹文化事業実施調査報告書』に基づき1938年に設立された。松宮一也の父である松宮弥平が主任を務める日語文化学校には、このための「暹羅事業部」が置かれ、バンコク日本語学校の最初の教師として、日語文化学校の教員であった星田晋五が選ばれた。星田は早稲田大学文学部を卒業し神奈川県立学校の教諭を経て日語文化協会の日本語教師養成所を終了して1936年より財団法人日語文化協会日語文化学校の教員となっていた。日語文化学校からはもう1名、同じく日本語教師の高宮太郎も赴いた。北村・ウォラウトによる一連の研究(2001、2006、2007)によると、この時期は星田晋五が日本語学校の規則書を整備し、『日本語のしをり』と題した教材を作成するなど精力的に活動していたことがわかる。

しかし、その星田は1939年に読売新聞社バンコク特派員となり、しばらく学校の仕事を兼務したが、1940年8月ごろには去り、後任の平等通照がバンコクに到着するまではすでにタイ国で美術の指導をしていた三木栄らによって担われた。平等通照がバンコクに到着したのは1940年10月で、彼は日泰文化研究所の主事となった。

北村・ウォラウト(2007)によって紹介された1940年の「日本タイ文化会館およびバンコク日本語学校規則」によると、同校の目的は「日本語および日本文化を教えるため」で、「実用的な『直接法』により授業を行う」とある。そして、「成績優秀で健康な者なら、選抜試験後、日本への留学、または日本見学という特権の他、賞金、または就職斡旋などの支援を受けられる」と、日本とのネットワーク構想の実現が謳われている。「小学校義務教育を終了した12歳以上の者なら、男女問わず」応募でき、募集期間内(4月1日-5月2日)であれば定員を超えない限り無試験で入学できる。

「一般クラス」は初級からの3年制で週当たり10時間⁽¹³⁾、17:00-18:25と18:30-19:55の二部制で、日本留学予定者等集中講義を希望する人のための「特別クラス」は1年間で週当たり20時間、17:00-19:55と書かれている。

平等(1943)によると、開校当時の生徒数は150名ほどであったが、彼が着任したころは「日本語の難しさに断念したり、日本へ留学に出発したりして」5, 60名ほどに減っていたという。以後順次増加したとあるが、鈴木忍の着任した1941年7月はその増加期にあたる。そして、この稿が執筆されたと思われる1942年の後半には、生徒数は350人から400人で、午後3時半、5時、6時半開始の3部授業、それぞれ5クラスを運営していた。専任教員としては平等と鈴木忍と「外1名⁽¹⁴⁾」、それ以外の教員として佐瀬芳之助、ほかに男女5名のタイ人教師がいた。バンコク日本語学校は日本の外務省や現地の日本大使館の監督の下にありつつもタイ国の制度の内にあり、タイの教員資格を取得していない日本人教員は担任になることができなかったため担任はタイ人教師が務めたということである⁽¹⁵⁾。

平等(1943)は、普通の学校が休みになる2月から5月には生徒数が600人近くに及び、「昼夜兼行の4部授業」を行った、とも書いている。柳澤(1943)はこのころのバンコク日本語学校を訪問した感想を次のように記している。

・・・せいぜい数十人の生徒位あれば、——といふ当初の考へで^(ママ) 初めたこの学校が、今では四五百人、それも大部分は夕刻退庁時間にドツと押し寄せるのだから、その風景は壮観と言はれぬことはないにしろ、校舎の内外芋の子を洗ふが如くで、同時に小部屋を切つて教室にして^(ママ) 建物だから一度に百人以上を収容し得る場所なぞはなく、教師は三部教授位はせねばならぬと言つた苦しい状態である。

それにしても、一教室のなかに弱きあり^{わか} 壮なるあり^{さか} 男あり女あり、それが一生懸命になつてノートを取りながら我等の懐かしき言葉を教はらうとしてゐる有様は、感動なしには見られぬものであつた。

それに、教師としては開校当初から奮闘してゐる高宮氏があり、東京の国際学友会で既に悉さに体験を得てゐる鈴木氏があり、また校長としては仏教研究の爲め印度に留学したこともある平等文学士があり、その他誰彼と、いづれも戦年前から^(ママ) 重要の割に一向報いられることのすくないこの仕事に懸命に努力してゐるのを親しく見て、これ亦感動なしにはみられなかつた。(p. 41)

鈴木忍にとってはかつて経験したことのない大人数の生徒を相手に、体系的な授業を授けるため文字通り奮闘の毎日であったと思われるが、その傍ら、着任早々、赴任前から学習してきたタイ語力を強化しつつ、日泰文化研究所（1942）『簡易日泰会話』の執筆にあたった。平等通昭による「序文」には「この編著には弊研究所職員が文字通り全員協力したのであるが、特に三木栄氏と鈴木忍氏とは労を尽し、貢献するところが多かった。」と書かれているが、この原本を所蔵されていた鈴木智子夫人等関係者には鈴木忍の著作として伝えられていたようである。いわゆるポケット版200ページほどの小冊子で、前半は「日常用語」として分類別に単語が、後半は場面別の会話例が日本語タイ語の対訳で掲載されている。それぞれ左のページは漢字と片仮名、右のページはタイ文字で、左ページの左側は漢字と片仮名で書かれた日本語、右側にはカタカナ表記によるタイ語の発音、右ページの左側はタイ文字で書かれたタイ語、右側はタイ文字で表記された日本語の発音というように、各見開きページにこの四種が並んでいる。

初めに「日常用語」として主として単語⁽¹⁶⁾が分類順に一千余り並べられている。分類は次のとおりである。

- (1) 数、(2) 日付、(3) 週、(4) 時、(5) 天文、
- (6) 地理、(7) 人事、(8) 身体、(9) 病気、(10) 飲食、
- (11) 穀物・野菜・果物、(12) 日常用品、(13) 商・工、
- (14) 学校、(15) 官庁、(16) 官位、(17) 軍、(18) 色、
- (19) 動物、(20) 乗物、(21) 形容語

そのあとに「物ノ数へ方」として序数詞が挙げられている。

会話例は「電話ヲ掛ケル時」「市中見物」「道ヲ尋ネル時」「電車、バスニ乗ル時」「飲食店ニテ」「旅館」「郵便局ニテ」「買物」「文房具店ニテ」「帽子店ニテ」「靴屋ニテ」「書店ニテ」「洋品店ニテ」「薬品店ニテ」「洋服屋ニテ」⁽¹⁷⁾「時計屋ニテ」「病院ニテ」「映画館ニテ」と場面ごとに挙げられているが、これらの前に「ヨク使フ言葉」「挨拶」、最後にタイ・バンコクの固有名詞の類が「文化機関、公会等」「著名ノ場所」「著名ノ道路」「市内ノ有名ノ寺院」「著名ノ橋ト運河」の順に挙げられている。実用性を重んじた作りで、タイ在住の日本語話者にとっても有用であったと思われる。鈴木（1981）の「著作目録」ではこれがその最初に挙げられている。

平等（1943）によると、バンコク日本語学校では「邦人教師が自分で教材を作り、謄写版印刷して」使用していた。現場の必要に応じて、鈴木忍はさまざまな教材を作成したものと思われるが、会話の授業の教材には、『簡易

日泰会話』が利用された可能性もある。

鈴木忍は、1943年4月に財団法人日タイ文化協会が設立されるとその在バンコク日本文化会館日本語教務主任に就任し、バンコク日本語学校教授を兼務することとなった。その5月、平等通照は1943年5月にバンコクを引きあげて帰国した。同年7月、既にタイ語に堪能であった鈴木忍はタイ国文部省令による私立学校長の資格を取得し、バンコク日本語学校の校長となった。なお鈴木(1944)はタイにおける普通教育の制度についての詳細な調査報告である。

平等が去った後の状況を報告したと思われる關野(1943)によると、専任教員は鈴木忍1名で他に本務を持つ講師が3名、タイ人教員は8名で、このメンバーが1942年9月に創立されたバンコク第二日本語学校の授業をも担当したとある。生徒数は、1943年3月15日現在でバンコク日本語学校が259名、バンコク第二日本語学校が103名と報告されており、鈴木忍の激務の程が想像される。

關野(1943)にはバンコク日本語学校における使用教材として日本語教育振興会『ハナシコトバ』⁽¹⁸⁾と並んで『日本語の基礎』鈴木忍氏編纂⁽¹⁹⁾との記述が見られ、鈴木忍が日本語入門期用の教科書を編纂したことを示す記述として注目されるが、実物は確認できていない。戦後の混乱の中、荷物を制限され着のみ着のまま帰国した鈴木忍にとっては小型の『簡易日泰会話』を1冊持ち帰るのが精一杯だったのかもしれない。タイ国内での発見が期待される。

バンコクでの使用教材について、鈴木忍は次のように語っている。

私は、あの岡本さんの『日本語教科書基礎編』⁽²⁰⁾を、タイのバンコク日本語学校で最初使ってみたんですが、あれは、どうも文法用例に過ぎたものでとても使いにくかったです。それよりも日本語教育振興会の『ハナシコトバ』を使いました。『ハナシコトバ』の良さを、タイで痛感しました。それから、湯澤(幸吉郎)さんの『日本語表現文典』⁽²¹⁾。あの本のいわゆる種々の場における表現のあり方は画期的でした。ですから、『NIHONGO NO HANASIKATA』を作る時、一番拠り所にしたのは、『ハナシコトバ』と『日本語表現文典』です。

実際、鈴木忍らによる戦後の教科書『日本語読本 1-4』は岡本千太郎による国際学友会の『日本語教科書巻1-5』(1941-1943)の直接的

な影響を受けて編纂されているのに比べ、入門書にあたる『NIHONGO NO HANASIKATA』には岡本の『日本語教科書 基礎編』の影響は見られない。鈴木忍は『ハナシコトバ』とその『学習指導書』⁽²²⁾に「非常に啓蒙された」「日本では（いわゆる文型が意識的に扱われた日本語の入門用の教科書は）『ハナシコトバ』が最初のもので」と『ハナシコトバ』に高い評価を与えている。現地で作成された『日本語の基礎』もその影響を受けて書かれたものと思われる。その後、1944年に刊行された国際文化振興会『日本語表現文典』が重要な参考文献として加わることで、戦後の代表的な著作『NIHONGO NO HANASIKATA』が生まれた⁽²³⁾。戦時中の日本語教育の成果と経験が戦後の日本語教育に生かされた具体例として銘記すべき事柄である。鈴木忍がその後の生涯にわたってとりくむことになる日本語教育のコース運営や教科書編纂を含む仕事⁽²⁴⁾の素地はこの時期のバンコクでの4年間のうちに固められたと言える。

さて、1944年4月から5月にかけて鈴木忍は日本へ一時帰国をした。業務上の主目的はこのとき初めてタイから送られた「南方特別留学生」の引率である。金澤（1973）は「泰班は、この年から始めて実施されたもので、この引率者は、本会創立以来の職員で現本会教育部長の鈴木忍君であった（p. 79）」と記している。鈴木忍は彼等の選抜や日本語指導をも責任をもって行った可能性がある。井坂（1944）はこの12名について次のように記している。

彼等（河路注：タイからの「南方特別留学生」）は12名で、すべて20歳前後の元気一杯の青年たちである。（中略）本年2月下旬盤谷を出発し、3月下旬に東京に到着した。（中略）全員盤谷で3ヶ月間日本語の予備教育を受けて来て居り、その後5ヶ月間のたゆまぬ訓練によつて、今日では大抵の日常会話には事欠かないまでになつてゐる。（p. 39）

ほぼ時を同じくして、同年4月22日、当時文部省の図書監修官で日本語教育振興会の常任理事であった釘本久春が約4か月に及ぶ「仏印・泰及南方占領地域に於ける日本語普及状況視察並に連絡」のための出張から「帰京」した⁽²⁵⁾。釘本（1944）にはこの視察旅行の報告とともに、この時の鈴木忍に会ったことが記されている。

(河路注：4か月余りの南方視察旅行から) 帰京後、最近私は、泰国の若き留学生を連れて上京したスズキ教授と逢った。

——長い旅で、なかなか大変だったでせう。」

——大したことはありません。夜だけ起きてみればいいのですから。」

誰に命ぜられ頼まれたわけでもないのに、スズキ教授は、長い船旅の間、夜の睡眠を多くはひるまに代へて、夜は生徒の眠つてゐるのを見守りつつ来たのである。(pp. 8－9)

1944年5月19日実施の「財団法人日本語教育振興会第十回理事会報告及議題」には「報告」として以下の記述がある。

本会研究部ニ於テ左記ノ講演会ヲ神田事務所ニ於テ行ヒ、職員及實際教育家ノ有志之ヲ聴講ス

5月8日 南方諸地域ニ於ケル日本語普及 釘本久春氏

午後1時ヨリ

5月25日 泰国ニ於ケル日本語問題 鈴木忍氏

午後1時半ヨリ

鈴木忍が日本で「講演」を行うとの記録はこれ以前には見られない。釘本久春と鈴木忍の親交がいつから始まっていたかは定かではないが、釘本は鈴木忍の将来性を見込んだものと思われる。この一時帰国中に、鈴木忍は釘本久春の妻の妹、智子と結婚し、智子夫人を伴ってバンコクに戻った。

バンコクにおけるその後の鈴木忍について、チュムシン・ナ・ナコーンの証言がある⁽²⁶⁾。チュムシンは第一回タイ国招致学生として1942年9月に来日し国際学友会で日本語を学び1944年3月に卒業、同年4月に日本女子大学理科に入学するも戦況悪化により勉学を中断して1945年2月にバンコクに帰った後、バンコク第二日本語学校の教員となった。以下、チュムシンが鈴木忍について語っている部分を引用して示す。

1945年2月に日本から帰って、バンコク第二日本語学校の教師になりました。誰が誘ってくれたのかわかりませんが、鈴木先生が校長でしたね。国際学友会からの連絡かもしれません。一緒に船で帰ったタイ人学生は30人ほどいましたが、バンコク日本語学校の教師になったのは

私1人でした。この学校では昼間勤めている人が対象なので、昼のクラスはなく、夕方からクラスが始まりました。1クラス40人ほどを一度に教えました。日本語クラスとは別に日本軍の兵隊さんたちにタイ語を教えるクラスがあって、ここでタイ語を教えていたのが、のちに夫となった人です。

バンコク第二日本語学校では、鈴木忍先生と一緒に働きました。ここで日本語を教えていたのは、鈴木先生と私のほか、2,3人でした。鈴木先生はやさしい人で、タイ語が少しできました。教科書は国際学友会のもので使っていたかどうか、覚えていません。8月15日の日本の敗戦にはびっくりしました。戦争はもういやだと思いましたから、戦争が終わったのはよかった、これで平和になると思ってほっとしました。最後のほうは、バンコクにも爆弾が落とされるようになっていたのです。これが終わるのはいい、と思いました。日本が負けた、というのはよくわかりましたが、タイは負けたのか勝ったのか。どちらでもなくて、これは難しいです。バンコク第二日本語学校では、日本語を勉強する生徒は最後までいましたが、戦争が終わると、学校は閉鎖され、鈴木先生は捕虜になってタイの軍隊が管理する収容所に入れられました。

私はこのとき、収容所に鈴木先生に会いに行きました。そのとき、鈴木先生には赤ちゃんがいました。先生を見て、かわいそうだと思います。先生は日本に帰りたいと言っていました。このあとどうなるか、みんな見当もつきませんでした。

ここに語られている「赤ちゃん」は1945年7月に誕生した鈴木忍の長子、鈴木^{たい}泰氏である。その誕生からひと月後、日本の敗戦でバンコク日本語学校は閉鎖され、鈴木忍は校長を辞任することを余儀なくされた。そして乳児を含む家族三人、バンコク日本文化会館の関係者一同と共に、バンコク郊外の「泰国バーングブアトーン第3抑留所」で生活することになった。筆者が北村武士氏より閲覧させていただいた「泰国バーングブアトーン第3抑留所入所者名簿」によると、「第5棟」の入所者23名の中に「バンコック日本文化会館」の関係者が名を連ね、鈴木忍・智子・泰の名も確認される。所有者、糸原周二氏の筆跡で「バンコック日本文化会館」関係者の名前に役職名が付されているが、それによると、鈴木忍と並んで智子夫人も「教師」である。鈴木忍一家が抑留所を出て帰国したのは1946年7月のことであった⁽²⁷⁾。

3-3 バンコクより帰国後

帰国後の鈴木忍については知る人も多いところだが、本稿ではタイでの経験がその後に及ぼした影響に焦点を当てて整理しておく。

抑留所を出て帰国した時、鈴木忍は 32 歳になっていたが、鈴木忍の不在中（1943 年 4 月）に開校した国際学友会日本語学校も 1945 年 12 月に閉校となっており、敗戦間もない日本で日本語教師の仕事を得ることはできなかった。鈴木忍は慣れない材木商の仕事始めて失敗し、1948 年からは東京の出版社、刀江書院で働いた。

やがて 1951 年に国際学友会で日本語教室が復活すると同時に、鈴木忍氏は主任教員として復帰し、授業の傍ら教科書を編纂した。バンコクでの経験の生かされた国際学友会日本語学校(1959)『NIHONGO NO HANASIKATA』はローマ字書きの初級用教科書だが、これに続く『日本語読本 1-4』とともに 1980 年代にかけて版を重ねた。鈴木忍はこの教科書を使ってコースを軌道に乗せ、1965 年には国際学友会日本語学校校長に就任した。

戦後は多様な母語を持つ学習者に向き合うことになったが、鈴木忍は当時の日本語教師には珍しいタイ語の使い手であった。戦後初期の著作には特にタイ語やタイ人学習者の誤用を照らして考察されたものが少なくない。主なものを 3 点、挙げておく。

最初のもは、1958 年に刀江書院から刊行された国際学友会監修、奥野金三郎著『タイ日大辞典』である。鈴木忍はこの凡例を執筆、全体の監修をした（鈴木 1981 : 140）。「刊行の辞」にも記されているようにこの辞典は元来 1945 年に出版されるはずのものであった。タイ人留学生への対応をきっかけに設立された国際学友会では、多数を占めるタイ人学生のため、1940 年より泰日事典の編纂にとりくんでいた⁽²⁸⁾。そこへ奥野金三郎⁽²⁹⁾が八万語に及ぶタイ語語彙を収集し辞典の原稿を整えていることが分かり、これを国際学友会から出版することになったのであった。1944 年春、初校の印刷を終え 1945 年初めに校了したが、発刊寸前に印刷工場が戦火に焼けおち、一切が焼失した。偶然残った第 4 校をもとに新たに整えて刊行されたのが 1958 年の『タイ日大辞典』である。「刊行の辞」に「凡例は監修者が新たに付加した」とあるのみで、鈴木忍の名前は記されていないが、7 ページにわたる「凡例」は、「語彙」「発音」「声調」「黙音符号」「正書法」「訳義・訳語」「語の配列順序」「繰返し符号、省略符」「音節字母表」「子音字母表」の順に体系だった記述がなされており、鈴木忍のタイ語に関する言語学的知識の豊かさうかがえる。「監修者」と記されている「刊行の辞」の筆者も鈴木

忍である可能性がある。

その後、鈴木忍は1962年、国際学友会の『ISI月報』95号（2月）、98号（5月）、102号（9月）に、「日本語教育——タイ人に対する場合」⁽³⁰⁾を寄稿した。タイ語を母語とする学習者の日本語の発音や文法、語法の習得過程に見られる誤用についてタイ語からの干渉の視点から分析的に解釈され、その指導の留意点がまとめられている。また、翌1963年には鈴木忍がその設立に尽力し理事を務めていた「外国人のための日本語教育学会⁽³¹⁾」の学会誌『日本語教育』2号に「発音の指導と問題点—タイ語国民を中心に—」を発表している。これはタイ語母語話者の日本語の発音に見られる母語干渉に焦点をあてたもので、母語干渉の起る発音の中でも、「シ」と「チ」のように日本語の音素対立にかかわり語の弁別に支障の起る可能性のあるものに重点をおき、その指導の要点が整理されている。鈴木忍は学習者の誤用例から日本語教育のための文法記述を行った先駆者と言えるが、そうした方法はバンコク以来のタイ語との対照研究への関心から生まれたものと思われる。

その後、1970年に東京外国語大学外国語学部附属日本語学校が創設されると教授に就任、教務主事を兼任し、東京外国語大学附属日本語学校（1973-1975）『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』を編纂した。これは鈴木忍が単独で初級から中・上級まで、また練習用の副教材を含めて全体を著したもので、鈴木忍の教科書の集大成と言える。ここでも教科書編纂と並行してその日本語教育を軌道に乗せた。

1978年に定年退職後、大東文化大学留学生別科教授に就任したが、翌1979年6月22日、思いがけずも病気で早世した。65歳であった。

国際交流基金（1985）『日本語初歩』は遺著に当たる。鈴木忍は全体の構成と21課までの執筆を行ったが、残りの部分は遺志を受け継いだ川瀬生郎が執筆した。

4. 鈴木忍のタイへの愛着

鈴木忍の65年の生涯は日本語教育に捧げられたと言ってよいが、27歳から32歳の5年間をタイで過ごし、4年間をバンコク日本語学校で仕事に勤しんだ経験は、その後の人生に決定的な影響を与えたものと思われる。生涯の伴侶と長男を得るなど、私生活の上でも忘れられないできごとの刻まれた歳月であった。鈴木忍が生涯にわたってタイを第二の故郷と偲んだ所以であろう。

日本語教師のライフストーリー研究への関心から本稿では最後に、仕事以外のエピソードにも触れ、鈴木忍が生涯にわたって持ち続けたタイへの愛着について考察を加えてみたい。

鈴木忍は1945年7月にバンコクで生まれた初めての子どもの名を「泰」と名付けた。鈴木泰氏ご本人によると、初めは訓読みで「やすし」と読むつもりだったが、抑留所でも「タイちゃん」と呼ぶ人が多く、これを正式な戸籍名としたそうである。タイの国名を表す「泰」の字をとって名付けたことはタイへの愛着の表れであろう。また、泰氏によると、智子夫人は在タイ期間が抑留所での生活を含めて2年2か月に過ぎなかったにも関わらずタイ語を自由に操り、1957年に日本に亡命したピブン元首相の日本語教師を務めたという。鈴木忍一家にとってタイとのつながりは戦後の空白をはさんでなお、切っても切れないものになっていたことがわかる。

同じくバンコクで築かれた絆の強さをうかがわせる鈴木忍自身の文章を次に紹介する。鈴木忍は素顔をのぞかせるエッセイの類をほとんど残していないが、国際学友会『ISI会報』1961年4月号に掲載された出張報告「カイロ・バンコック」⁽³²⁾は、珍しく抒情的に綴られている。4か月ほど派遣されていたアラブ連合共和国からの帰途、タイ国に立ち寄った鈴木忍はここで待望の教え子たちと感動的な再会を果たし、かつての仕事の次のように回想している。

戦時中私はタイ国で日本語教師をやるかたわら、在タイ日本文化会館の一員として、旧日本留学生会の仕事をも担当していました。当時の留学生会はだいたい昭和9年以降日本に留学して来た諸氏が主体をなしていました。したがって、年齢的にも私とそれほど差があったわけではありませんから、国際学友会で日本語を教えた教師というよりも、むしろかれらの友人としての交際をやってきたものであります。

この時、それぞれ社会的に高い位置についている戦時中の留学生たちが自分たちが率先して日本留学生会を作りたいと⁽³³⁾話したとき、鈴木忍の胸に熱いものが込みあげた。

なんといい時に居合わせたものだと、私は思いました。戦時中現在ここにいる諸氏とはかり旧日本留学生のクラブの建設を計画しましたが、それに実現するにいたりませんでした。それが16年目にたずねてきた私

の目の前で、同じメンバーがこんどは自分たちの手でクラブを建設しよう。そして、それを中心に活発な動きをやろうと立ち上がっているのです。私は目頭の熱くなるのをどうにもおさえることができませんでした。

鈴木忍のタイへの愛着は、その生前を知る人々によっても語られている。例えば長く鈴木忍の身近で日本語教育に従事した伊藤芳照（1978）には以下のように書かれている（傍線：河路）。

鈴木先生といえば、タイ国と酒のことを思い浮かべる人は学内外を問わず多いであろう。全くこの二つをはずしては、鈴木先生の間人間は語れないくらいのものである。以前からそうであったが、本校においてもタイ国の学生からは、特別に敬慕の情を寄せられておいでだし、先生のほうでも、タイ国のそれも特にお嬢さんがたには、父親のような情愛の念をもって接しておられたようにお見受けする。（p. 23）

このことについて 1960 年代に東京外国語大学外国語学部附属日本語学校で日本語を学んだチュラロンコン大学のカラヤニー氏にうかがってみたところ⁽³⁴⁾その通りであったとの証言を得た。鈴木忍はタイからの学生だけを集めて食事に行くこともあり、「先生は特にタイの学生が好きだ」という印象を持ったということである⁽³⁵⁾。

同じく鈴木忍の下で日本語教育に従事した経験を持つ豊田豊子氏によると、鈴木忍の晩年（1979 年）に見舞いに訪れた際、「何か欲しいものは」という豊田氏の問いに鈴木忍は「南の国の果物が食べたい」と答えたそうである。「鈴木先生は、一生タイが忘れられなかったのだろう」と豊田氏は話された⁽³⁶⁾。

戦争中の特殊な事情によって生まれた日本語教育の現場であったとはいえ、鈴木忍とタイの人々の間には確かな信頼関係が築かれていたことがわかる。それがこの仕事への信頼にもつながり、仕事への熱意を支えたのではなかっただろうか。

5. おわりに

直接法全盛で外国語に習熟することの必要性が声高に唱えられることの少なかったこの時代において、バンコク赴任に際して鈴木忍がタイ語を習得したことは特筆に値する。あるいは鈴木忍はその後長くこの地で仕事をしよ

うと準備したものかもしれないが、思いのほかの展開で帰国したあとも、タイ語と日本語の対照研究に関心を持ち、やがて、より広い範囲の学習者の誤用例の考察を通して、普遍性のある日本語学習のための困難点とその指導法を研究、教材を開発して、教育実践を行った。戦後世界各地の日本語学習者に使われるロングセラーの教科書といえば、鈴木忍の著作が長沼直兄の著した教材⁽³⁷⁾と双璧を成すが、両者とも学習者の言語に通じ学習者の言語への深い理解の上で教育実践を行った点に共通点があるのは興味深いことである。戦前の国際学友会で力をもった国語学の専門家の多くは戦後、日本語教育を離れた。

もとより、鈴木忍がバンコクに赴いた時代の日タイ関係は歴史的な事情を背景とする特殊なものであった。第二次世界大戦という世界を揺るがす事態に臨み、両国が生き残りをかけて急接近した短い期間であった。そうした文脈においてふと近づいた日本とタイの接点に居合わせた鈴木忍は、この時に身に付けたタイ語とタイへの愛着を大切に、生涯をかけて日本語教育の発展に貢献した。このことは、私たちに「時代を超える言語教師の生き方」また「言語教師の生涯を貫くビリーフ」を考えるための示唆を与えてくれる。

日本語教育の現場や日本語教師の仕事が社会状況の変化や時の政策に左右されやすいことはいつの時代も変わらない。時々々の要請にこたえて日本語教師は現場に赴くが、要請の根拠となった事情や政策の命は大抵、人間の一生よりはるかに短い。多様なニーズに臨機応変に応えつつ、それに振り回されることなく、それを超えた目的を持ち得たとき、日本語教師は生涯をかけるに足る職業となるのではないだろうか。学習者の文化や言語への親愛と日本語という言語そのもの、そしてそれを学ぼうとする者への好奇心も、鈴木忍氏が一貫して持ち続けたものであった。

謝辞

本稿は2008年5月7日チュラロンコン大学における「外国語としての日本語修士課程設立一周年セミナー」での発表をもとに、その後の成果を加え構想を改めてまとめたものである。発表の場をくださったウォラウト先生をはじめとする関係者の皆様、当日さまざまな刺激を与えてくださった参加者の皆様、また鈴木忍氏の思い出を聞かせてくださった鈴木泰先生、豊田豊子先生、川瀬生郎先生、チュムシン・ナ・ナコーンさん、貴重な研究成果と第一次資料の閲覧、複写をご許可いただきました北村武士先生に、心から感謝申し上げます。

注

- (1) これを日本はタイの日本への好意と解釈し、そのように報道されたが、タイ側の事情は必ずしもそうではなかった（市川1994）。
- (2) 「国際学友会会則」（1935）第三条。
- (3) 『国際学友会会報』第1号から第3号まで（1936年2月から1940年3月末現在）の「役員名簿」には、教員職を特定する職名はない。鈴木忍の名前は「職員」として第1号から確認される。
- (4) 「事務員」の中に言語に専門性を持つ人物は存在した。1936年度より日本語教育の主任格であったのは東京外国語学校ドイツ語科出身の元ドイツ語教員、依田千町であった。1936年12月には日本語教授を主たる職務として米国留学経験を持ち私塾で英語を教えていた村田重治が採用されている（河路2006）。しかし、彼等は「（日本語教育の）素人」と認識されていたようで、鈴木忍の談話資料（1974）でも、鈴木忍は「あの当時は、もう亡くなりましたが依田（千町）という東京外語のドイツ語を出た人、それから私、それから立命館、いや同志社を出た英語のうまい牧師さんがいました。村田という人でした。こういう人たちで、素人ばかりで日本語を教えていました」（傍線：河路）と語っている。
- (5) 国際文化振興会（1937）「日本語普及に関する第一回協議会要録」の中で服部四郎は「私は満州に居ります間に色々な露西亜人とかタタール人とか蒙古人などに日本語を教へたことがあるのでありますが、ほんの初歩だけでありまして・・・」（p.59）と述べている。
- (6) 1974年の鈴木忍の談話資料より。
- (7) 1936-1945年の国際学友会については河路（2006）に詳しい。
- (8) 河路（2006）に収めた関係者への聞き取り調査においても、松村明、永鳥愛子らが岡本のこの考え方を説明している。
- (9) 1974年の鈴木忍の談話資料より。
- (10) 国際学友会で受け入れた南方特別留学生は、1943年度が104名、1944年度が101名の合計205名であった（河路2006ほか）。
- (11) 1974年の鈴木忍の談話資料より。
- (12) 1974年の鈴木忍の談話資料より。
- (13) 各クラス、実質的な時間は1日に85分である。これを2コマに割って2時間とし、1週間に5日、10時間と数えたものと思われる。
- (14) 平等（1943：234）。不自然な記述だが高宮太郎を指すと思われる。

- (15) バンコク日本語学校のタイでの位置づけは、「泰国内務省で私立小学校として公認され、上級小学校科目中外国語のみを教へることになってゐる。」(平等 1943 : 234) というものであった。
- (16) 例えば「病氣」のところには「薬ヲ塗りマス」「診テ貰イタイ」など 2 語以上の慣用的な言い方も含まれている。
- (17) 内容を読むと、「洋品店」は既製服を販売する店であるのに対し「洋服屋」は生地から洋服を仕立てる仕立て屋のことである。
- (18) 日本語教育振興会が大陸・南方の年少者用に作成し、中国の占領地を中心にアジアの各地で使われた。上・中・下の三冊で、B 6 判各 50 ページ程度、カラーのイラストが多用されている。
- (19) 原文では「鈴木忍」の名が「鈴木栄」と誤記されている。
- (20) 国際学友会 (1940) 『日本語教科書基礎編』。執筆者は岡本千万太郎。
- (21) 国際文化振興会 (1944) 『日本語表現文典』。表現文型が機能別に並べられており、戦後の日本語教育に大きな影響を与えた。
- (22) 日本語教育振興会『ハナシコトバ』の上・中・下には、それぞれに A 5 判 300 ページほど(「下」は約 200 ページ)の詳細な『ハナシコトバ学習指導書』があった。執筆者は、当時日本語教育振興会理事であった長沼直兄である。直接法による授業の進め方がシナリオのような体裁で示されている。
- (23) 上記引用中の『NIHONGO NO HANASHIKATA』に関する鈴木忍の証言は、豊田 (1996) に引用されている阪田雪子による「学友会の教科書ができるまで」(日本語教育学会“学会ニュース”46号, 1989)の中に、「(河路注: 1954年『NIHONGO NO HANASHIKATA』の) 編纂に当たって参考にしたのは、戦時中の日本語教育振興会編纂(長沼直兄代表)の南方向けの教科書である。」と述べられているのに符合している。
- (24) 鈴木忍は、戦後、本務のほかにも、1955年に早稲田大学留学生補習科で日本語教育が始まると講師を兼任してその始まりを支え、国際交流基金による派遣で海外での指導も行い『日本語初歩』(1982)を執筆するなど広い範囲で日本語教育の発展に尽力した。
- (25) 「財団法人日本語教育振興会第六回理事会報告及議題」(1944年4月28日実施)より。釘本が東京を出発したのは1943年12月21日であった(「日本語教育振興会第七十回理事会報告及議題」1943年12月24日実施)。
- (26) 河路 (2007) 所収の同氏への聞き取り調査資料より。聞き取り調査は

2005年10月3日バンコクにおいて実施。

- (27) 瀬戸正夫 (2001) に「バーンブアトーン・キャンプ」に収容された経験が描かれている。
- (28) 1940年度からの国際学友会における泰日辞典の編纂作業と、出版に至った奥野金三郎の著作は別のものである (河路 2006)。
- (29) 奥野金三郎は、駐泰日本公使館に十年余り勤務した後、台北高等商業専門学校でタイ語を教えていた。
- (30) 鈴木忍 (1981)、88-106 にまとめて収められている。
- (31) 現在の日本語教育学会の前身で 1962 年に設立された。1961 年に開かれた「日本語研究会」のあと、鈴木忍と高橋一夫、釘本久春、林大の 4 名での懇談の折に構想が生まれ、それが実現したものだと言っている (1974 年の鈴木忍の談話資料より)。
- (32) 鈴木忍 (1981)、77-83 に収められている。
- (33) タイ国元日本留学生協会 (OJSAT) は 2002 年に国際交流基金より国際交流奨励賞を受賞した。その時、会員数は約 2700 名と紹介された。
- (34) 2008 年 5 月 8 日、チュラロンコン大学で開催されたタイ国日本研究会のレセプションの折に直接うかがった。
- (35) 鈴木忍がタイの学生たちと一緒に食事をしようというときには、豊田氏はその連絡役を依頼され、タイの学生たちに声をかけて、食事に同席されることもあったという (2008 年 9 月 4 日のお電話より)。
- (36) 豊田氏は、当時は東京でも手に入れるのが難しかったマンゴーやパイナップルをやっと探して届けられたということである (同上)。
- (37) 『BASIC JAPANESE COURSE』(1950) とそれに続く『(再訂) 標準日本語読本』のシリーズ。長沼直兄は高度な英語力を駆使し、英語と対照させての文法説明を通して教材や教授法を開発した。

参考文献

- 石井米雄・吉川利治 (1987) 『日・タイ交流六〇〇年史』、講談社
- 伊藤芳照 (1978) 「鈴木忍先生と東外大附属日本語学校」『日本語学校論集』5号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、19-2.
- 市川健二郎 (1994) 「日泰文化協定をめぐる異文化摩擦」『大正大学 研究紀要』第 79 号、86-102.
- 奥野金三郎著、国際学友会監修 (1958) 『タイ日大辞典』、刀江書院
- 金澤謹 (1973) 『思い出すことなど』、財団法人国際学友会

- 河路由佳 (2003) 「国際学友会の設立と在日タイ人留学生—1932—1945 の日タイ関係とその日本における留学生教育への反映—」『一橋論叢』第 129 巻第 3 号、127-139.
- 河路由佳 (2006) 『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生—戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開—』、港の人
- 川瀬生郎 (1978) 「鈴木忍先生と日本語教育」『日本語学校論集』5 号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、3-18.
- 川瀬生郎 (2000) 「東京外国語大学附属日本語学校 1970 年代の研究活動について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター設立 30 周年記念 国際シンポジウム予稿集』、4-10.
- 北村武士、ウォラウト・チラソンバット (2001) 「昭和 13 年の日本—タイ文化研究所日本語学校の設立について—星田晋五の仕事を中心に—」『バンコック日本語センター紀要』第 4 号、国際交流基金バンコック日本語センター、137-145.
- 北村武士 (2006) 「1939 年バンコック日本語学校発行の『日本語のしをり』—タイ国日本語教育史の資料として—」『国際交流基金バンコック日本文化センター紀要』第 3 号、171-180.
- 北村武士、ウォラウト・チラソンバット (2007) 「1940 年のバンコック日本語学校について—資料紹介、日本語学校規則書」『国際交流基金バンコック日本文化センター紀要』第 4 号、99-108.
- 国際学友会 (1938) 『国際学友会会報第 1 号 (自昭和 11 年 2 月至昭和 12 年 10 月事業報告)』
- 国際学友会 (1939) 『国際学友会会報第 2 号 (昭和 13 年度事業報告)』
- 国際学友会 (1940) 『国際学友会会報第 3 号 (昭和 14 年度事業報告)』
- 国際学友会 (1941) 『財団法人国際学友会会報第 4 号 (昭和 15 年度事業報告)』
- 国際学友会 (1942) 『財団法人国際学友会会報第 5 号 (自昭和 16 年 4 月至昭和 17 年 8 月事業報告)』
- 国際文化振興会 (1937) 『日本語普及に関する第一回協議会要録』
- 鈴木忍 (1944) 「泰国の普通教育について」『日本語』4 巻 9 号 日本語教育振興会、6-11.
- 鈴木忍 (1963) 「発音の指導と問題点—タイ語国民を中心に—」『日本語教育』2 号、外国人のための日本語教育学会、7-20.
- 鈴木忍 (1977) 「文法上の誤用例から何を学ぶか—格助詞を中心に—」

- 『日本語教育』34号、日本語教育学会1-14.
- 鈴木忍 (1981) 『日本語教育の現場から』、財団法人国際学友会
- 鈴木忍・川瀬生郎 (1982) 『日本語初歩』、国際交流基金
- 關野房夫 (1943) 「泰国及仏印に於ける日本語教育の現況 (一)」『日本語』
第3巻第8号 1943年8月、日本語教育振興会、51-59.
- 瀬戸正夫 (2001) 『瀬戸正夫の人生 (上)』、バンコク・東京堂書店
- 豊田豊子 (1996) 「伝統的日本語教授法—長沼直兄と鈴木忍の場合— (第2
回)」『日本語教育研究』第31号、財団法人言語文化研究所、33-60.
- 西野順治郎 (1984) 『新版増補 日・タイ四百年史』、時事通信社
- 日泰文化研究所編 (1942) 『簡易日泰会話』、日泰文化研究所
- 長谷川恒雄 (2000) 「バンコク日本文化研究所 (1938) の日本語教育計画」
『日本語と日本語教育』第29号、慶應義塾大学日本語日本文化教育セ
ンター、1-20.
- 長谷川恒雄 (2003) 『『日暹文化事業実施調査報告書』にみられる日本語教育
施策の方向性』『日本語と日本語教育』第31号、慶應義塾大学日本語日
本文化教育センター、65-74.
- 平等通昭 (1943) 「泰国に於ける日本語教授」『外地・大陸・南方 日本語教
授実践』国語文化学会、234-238.
- 松井嘉一、北村武士、ウォラウト・チラソンバット (1999) 『タイにおけ
る日本語教育』、錦正社
- 松宮一也 (1942) 『日本語の世界的進出』、婦女界社
- 柳沢健 (1943) 「泰国人に日本語を教へる」『日本語』第3巻第2号 1943年
2月、日本語教育振興会、39-43.

未公開資料

- 「泰国バングブアトーン第3抑留所入所者名簿」(鈴木忍と共に収容さ
れていた糸原周二氏が保管されていたもののコピーを調査者、北村武士
氏より閲覧させていただいた。)
- 河路由佳 (2007) 『<オーラル・アーカイヴ班>聞き取り調査資料集タイ編
(04-Ka-1)・(05-Ka-1・2・3)』(東京外国語大学大学院地域文化研究科
21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」における研究
成果)
- 鈴木泰氏の聞き取り調査資料 (北村武士・河路由佳の2名による同氏への
2006年6月20日実施のインタビューに基づき、河路が編集しご本人の

校閲を受けたもの。)

鈴木忍氏の談話資料（1974 年秋、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校で行われた座談会のテープより作成。高橋一夫氏の退官記念の座談会で鈴木忍は聞き手であるが、戦前・戦中・戦後の話題について鈴木忍が経験を語っている。ご長男の鈴木泰氏のご意思を反映して作成した編集原稿を資料とした。もとの音源は 2008 年 3 月 28 日川瀬生郎氏よりコピーさせていただいた。）

*談話資料については公表を前提として準備を進めている。

日本語教育振興会（1941-1945）理事会議事録

*河路が連携研究者である平成 18 年度—20 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「第二次大戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究（研究代表者：長谷川恒雄）」によってデータベース化を進めており、近く公開する見込みである。